

### 村上春樹の中国：『中国行きのスロウ・ボート』という視点から

浅利, 文子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

253

(終了ページ / End Page)

266

(発行年 / Year)

2010-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006012>

# 村上春樹の中国

——『中国行きのスロウ・ボート』という視点から——

China by Haruki Murakami

—— A Perspective on "A slow boat to China" ——

(法政大学国際文化研究科博士後期課程)

浅利文子

ASARI Fumiko

## はじめに

一九八〇年に発表された『中国行きのスロウ・ボート』<sup>(注1)</sup>は、村上春樹最初の短篇小说である。この作品には、三人の在日中国人との邂逅を通じて「僕の中国」を見出した主人公「僕」が、ラスト・シーンで中国へ向う希望を語る姿が描かれている。しかし、『中国行きのスロウ・ボート』における村上は、現実の中国から目をそらし、日中近現代史にも触れまいとしている。そのため、この作品における中国・中国人は、発表当初は「概念的な記号のようなもの」と解釈され（川村湊）、後には、「<自己化>された<他者>の表象」（田中実）<sup>(注2)</sup>、あるいは「アジアと日本との関係のアナロジー」（山根由美恵）<sup>(注3)</sup>等と解説されて来た。

デタッチメントを標榜していた一九八〇年当時の村上が、自己韜晦と現実回避の姿勢を示しながら中国を取り上げたために生じた矛盾は、後年、中国や中国人に関連する作品が発表されるにつれて<sup>(注4)</sup>次第に解きほぐされ、『中国行きのスロウ・ボート』が村上の中国へ向ける視線の原点であったことはようやく明らかになった。特に、一九九二年から連載が開始された『ねじまき鳥クロニクル』<sup>(注5)</sup>には、

ノモンハン事件や日中戦争が登場人物の記憶として詳細に描かれ、村上春樹における中国の意味が明確に示される結果となった。それは、日中戦争をめぐる日本人の集団的記憶が主人公・岡田亨のように戦争を知らない世代の無意識の深層にも通底することを想起させ、日本人の集団的記憶と歴史認識のあり方を問うものであった。

本論では、『中国行きのスロウ・ボート』を村上文学における中国へ向かう視線の原点ととらえ、「僕」がいかにして三人の在日中国人との邂逅を通じて中国に向かう逆説的希望に到達したか、その筋道を明らかにしたい。それは、在日中国人へ向けるまなざしが「僕」の自己を逆照射することで「僕の中国」が認識され、さらに「僕」が誤謬としての「僕の中国」を乗り越える意思を抱いて遥かなる中国への思いを語り始めるまでの過程である。

### 絶望と希望の錯綜する中国

一九七九年のデビュー作『風の歌を聴け』<sup>(注6)</sup> 38章では、「僕」と在日中国人であるジェイは、すでに中国をめぐる次のような会話をしている。

「でも何年か経ったら一度中国に帰ってみたいね。

一度も行ったことはないけどね。……港に行って船を見る度  
そう思うよ」

「僕の叔父さんは中国で死んだんだ」

「そう……。いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ」

(『村上春樹全作品1979~1989①』一九九〇年五月講談社一一五頁~一一六頁)

「中国で死んだ」「僕の叔父さん」とは、『風の歌を聴け』1章で紹介された「終戦の二日後に自分の埋めた地雷を踏ん」で死んだ叔父の

ことである。叔父の死の背景には、当然、日中戦争による無数の死者・犠牲者が存在し、「僕」の心に暗い影を落としている。こうした中国における殺戮と死者のイメージは、『中国行きのスロウ・ボート』1章末尾の「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」という一文にも示唆されている。

この会話の後、「僕」は東京に向かう夜行バスの乗車口で乗務員に「21番のチャイナ」と声をかけられる。「チャイナ？」と聞き返した「僕」に、乗務員は座席確認のため、「Aはアメリカ、Bはブラジル、Cはチャイナ」と言うのだと答える。「21番のC」の切符を持つ「僕」は「21番のチャイナ」に座って東京に向かうことになる。一方、故国の地を踏んだことのないジェイは、一九七二年九月の日中国交正常化以前の一九七〇年八月という作品の時点で、「いろんな人間が死んだ」「中国に帰ってみたい」と叶わぬ夢を語る。このように、『風の歌を聴け』38章には、次に引く『中国行きのスロウ・ボート』ラスト・シーンに通ずる、中国にまつわる絶望と希望の錯綜したイメージの片鱗がすでに表現されていたのである。

それでも僕はかつての忠実な外野手としてのささやかな誇りをトランクの底につめ、港の石段に腰を下ろし、空白の水平線上にいつか姿を現わすかもしれない中国行きのスロウ・ボートを待とう。そして中国の街の光輝く屋根を想い、その緑なす草原を想おう。

だから喪失と崩壊のあとに来るものがたとえ何であれ、僕はもうそれを恐れまい。あたかもクリーン・アップ・バッターが内角のシュートを恐れぬように、熱烈な革命家が絞首台を恐れぬように。もしそれが本当になうものなら……

友よ、中国はあまりにも遠い。

(『村上春樹全作品1979～1989③』一九九〇年五月講談社三九頁)

戦争と死者に表象される中国へ向かう希望を語る『風の歌を聴け』38章の矛盾は、そのまま『中国行きのスロウ・ボート』のラスト・シーンの逆説に通じている。しかし、この逆説的希望——「ささやかな誇り」を胸に、「喪失と崩壊のあとに来るもの」を恐れず「あまりにも遠い」中国へ向かおうとする決意——は、三人の在日中国人との邂逅の意味が「僕」の裡で熟成する約二十年の歳月を経た後に、ようやくもたらされるのである。

### 不確かな記憶と無意識

『中国行きのスロウ・ボート』は、「三十歳を越えた」主人公「僕」が1章・5章の現在において、2章から4章の過去の出来事を回想する典型的な額縁小説である。

2章の「僕」は一九五九年または一九六〇年に小学生、3章の「僕」は十九歳で大学二年生、4章の「僕」は二十八歳という設定で、ほぼ十年に一人ずつ、合わせて三人の在日中国人との邂逅が描かれている。2章の模擬テスト受検時に小学校高学年と仮定すると、「僕」の生年は、村上春樹の生年と同じ一九四九年をはさんで一九四八年から一九五〇年と想定され、1章・5章の作品の現在は、作品発表とほぼ同じ一九八〇年前後と推定できる。

この作品は、「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？この文章は、そのような、いわば考古学的疑問から出発する」と書き始められている。「たいていの僕の記憶は日付を持たない。僕の記憶力はひどく不確かである」と言う「僕」は、「最初の中国人」に出会ったのが「一九五九年なのか一九六〇年なのか」思い出せず、どちらの年か確認するために「近くの区立図書館」へ出かける。しかし、図書館の玄関先でふと、記憶の「不確かさによって僕は誰かに向って何かを証明しているんじゃないか」と思い至り、正確な年を確認すること

をやめてしまう。「一九五九年なのか一九六〇年なのか」にさんざんこだわった挙句に、区立図書館の玄関先まで来た「僕」があっさり踵を返してしまう、「僕」がこうした不可解な行動をとるのはなぜなのだろうか。

作者は、「僕」が「最初の中国人に出会った」年を「一九五九年なのか一九六〇年なのか」と繰り返して読者にそれらの年号を印象付けながら、他方では、記憶力の「ひどく不確か」な「僕」の個人的記憶を歴史としての集団的記憶に連結することを避けようと意図しているようである。「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう?」という疑問を「考古学的疑問」に喩えるのも、現実の中国に向かいがちな読者の意識を日中近現代史から逸らすためだろう。ここには、「僕」の認識を一九七二年の日中国交正常化や一九六六年から約十年にわたって展開された文化大革命等の現実の中国に直面させまいとする村上の意図が窺えるのである。

しかしそれでは、「僕」はどういう形で中国に出会うことができるのだろうか。「僕」の小学校時代のもうひとつの記憶は、「ある夏休みの午後に行われた野球の試合」で、飛球を追ってバスケットボールのゴール・ポストに激突し脳震盪を起こしたことであった。日の暮れかけたグラウンドで目を覚ました「僕」は、「僕に付き添ってくれていた友だち」から、失神中に「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」と、うわ言を言ったことを教えられる。このうわ言は、『村上春樹全作品1979～1989③短編集Ⅰ』に収録される際の改稿で、傍点を付した形からゴシック体表記に変えられ、視覚的により一層目立つ形に改められている。「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」という言葉を強調する意味は、「埃」が「誇り」と同音語という点にある。「埃」は、2章の中国人教師が日本人小学生に説く「誇り」と、ラスト・シーンで「中国行きのスロウ・ボートを待とう」と語る「僕」が抱く「ささやかな誇り」と同音なのである。

2章の「僕」は、中国人小学校の教師が、日本人と中国人は「お互いを尊敬しあわねばなりません」「顔を上げて胸をはりなさい」「誇りを持ちなさい」と説く言葉の裏に、日本社会における在日中国人の気負いを感じ取っている。「僕」は、中国人も日本人も人間としての「誇り」を持ち、「二つの国」は隣国同士として「お互いを尊敬し」あい「仲良く」なる「努力」をすべきだと説く中国人教師の意見を正しいと感じながら、その主張が場違いであることに日本社会に対峙する在日中国人の意識を敏感に感じ取っている。

「僕」は、自身の小学校時代を「戦後民主主義のあのおかしくも哀しい六年間の落日の日々」と揶揄している。この回想を語るのは「三十歳を越えた」「僕」であるが、この記述から、「僕」は小学生にしてすでに戦後民主主義の虚偽を嗅ぎ取る鋭敏さを備えていたことが窺える。そういう「僕」なら、中国人教師の理想と正義をふりかざす「お話」の陰に、在日中国人特有の屈折した心理——「プライドと自己憐憫の限りない振幅」<sup>(注7)</sup>——が潜んでいることに気づいたとしても不思議はなかつただろう。

しかし、同じ教室で彼の「お話」に終始沈黙で応えた他の日本人小学生たちと同様、「僕」もその時はまだ中国人教師の心理を明確な言葉で表現する術を持たなかった。そのため、行き所を失った「僕」の疑念は無意識下に沈潜し、「誇り」という言葉はいつの間にか同音の「埃」に置き換わり、失神して「おそらく夢でも見」た拍子に、「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」という、前後の脈絡を欠いた意味不明のうわ言として浮かび上がって来たと考えられる。<sup>(注8)</sup> 友だちがこのうわ言を「恥ずかしそうに」「僕」に教えたのは、この言葉に傍で聞いている人まで「恥ずかし」くさせるような卑屈な響きがこもっていたからだろう。「埃」は、中国人教師の唱えた「誇り」と表裏をなす「自己憐憫」だからである。

中国人教師の肩肘張った理想主義的言動が、日本社会で疎外されが

ちな在日中国人の示す過剰な適応であることに気付くともなく気付いていた「僕」は、約二十年後、自らを疎外に晒される一介の都市生活者と痛感したとき、初めて彼らに共感を抱くことになる。しかし十代から二十代まで、「僕」は、自らの裡に在日中国人に対する差別的感情が潜んでいるとは意識していなかったのである。

### 無意識の差別と忘却という差別

3章冒頭、高校生の「僕」は、「高校が港町にあったせいで僕のまわりにはけっこう数多くの中国人がいた。中国人といっても、べつに我々とどこかが変わっているわけではない。また彼らに共通するはつきりとした特徴があるわけでもない。彼らの一人一人は千差万別で、その点においては我々も彼らもまったく同じである。僕はいつも思うのだけれど、個人の個性の奇妙さというのは、あらゆるカテゴリーや一般論を超えている」と述べた。しかし大学二年生の春、アルバイト先で「二人目の中国人」である無口な女子大生と知り合った「僕」は、彼女に「僕」の内に潜む差別的感情を指摘される。

在日中国人である自分を大海に浮かぶ一滴の油のごとく感じていた女子大生は、絶えず現実との間に齟齬を生じないように、過剰なまでに気持ちを張り詰めていた。アルバイトにも、「まわりのあらゆる日常性はその熱心さによって辛うじてひとつにくぐられ支えられているのではないかといったような奇妙な切迫感」に満ちた「熱心さ」で取り組むため、「最後まで文句も言わず彼女と組んで作業ができたのは僕くらいのもの」であった。そういう彼女の生き方にむしろ「まともさ」を感じ取った「僕」は、アルバイトの終わった晩に彼女とデートをする。しかし「僕」は、門限を守ろうとして帰りを急ぐ彼女をなぜか新宿駅から「逆まわりの山手線にのせてしま」う。常日頃、「ここは私の居るべき場所じゃない」という疎外感を抱いていた彼女は、「僕」

の勘違いは「心の底でそう望んでいたから」起きたことだと訴える。彼女の言い分がどうしても納得できない「僕」は、翌日改めて彼女と会う約束をするが、「僕」はその直後に、彼女の電話番号を書きとめた紙マッチを捨てるという「誤謬」を重ねてしまうのである。

このように「過ち」が繰り返されるのは、女子大生の言うとおり、たしかに「僕」の潜在意識のなせる業である。しかし、彼女の自己憐憫に満ちた過剰防衛的な被害者意識がそれを促した面もあるのではないだろうか。つまり、この「過ち」は、どちらか一方というより二人が無意識のうちに招き寄せたと言う方が妥当なのである。二人が二度と会えなくなってしまうのは、彼らが「過ち」の原因を自分自身の裡に認識できなかったからなのである。

4章には、二十八歳になった「僕」が「高校時代の知り合い」の中国人に喫茶店で声をかけられ、なかなか彼の名前を思い出せないエピソードが描かれている。「僕」は「彼」を全く忘れている。一方、「彼」は「潜在的に」「昔のことを忘れたがっている」「僕」と「同じ理由で、昔のことを本当にひとつ残らず覚えてる」と言って「僕」に迫る。「僕」と「同じ理由」とは、「彼」が中国人だということである。「彼」が日本社会の少数者たる在日中国人であり、「僕」が日本社会の多数者たる日本人だということが、二人を鮮明な記憶と全き忘却の兩岸に隔てる原因となっているのである。

中国人だと気付いて初めて、「僕」は「彼」の名前を思い出す。しかし「僕」が思い出した途端に、「彼」は再び「中国人」という殻の中に身を隠してしまう。「僕」が中国人というヒントなしに「彼」を思い出すことができなかったように、「彼」はすでに日本社会における無名の「中国人」になり切っている。「僕」が中国人専門のセールスマンとして世過ぎをする「この男」に零落のかけりを認めるのは、「彼」が中国人だからではない。「僕」が忘却という無意識の免罪に身を任せているように、「彼」も「中国人」である自分に癒しがたい自

己憐憫を抱きながら、生活の糧と引き替えにその位地に安住しているからである。

「彼」の鮮明すぎる記憶と「僕」の全き忘却は、二人の対照を鮮やかに際立たせている。3章冒頭、高校生の「僕」は、自分を中国人に対する差別的感情をまったく持たない人物と考えていた。しかし、4章における忘却と記憶の対照は、「僕」と「彼」が、自覚のないまま、差別／被差別という心理の導く位地に佇んでいることを見事に炙り出したのである。<sup>(注9)</sup>

### 「僕の中国」

作者は、1章の冒頭に「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？」という疑問文を置きながら、それを即座に「いわば考古学的疑問」と呼んで、「僕」の中国をめぐる記憶を近現代史の問題から遠ざけていた。こうして「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？」という疑問は、「いつのこと」という歴史的要素を抜き取られて「僕」の「不確かな記憶」の方へ引き付けられ、「中国人」という他者に直面するとまどいに重点を移して行った。村上は、注意深く歴史という言葉避け、差別という言葉を用いることもなく、2章から4章において無意識と忘却に身を委ねる「僕」と三人の在日中国人との出会いを描き、あくまでも自己の内界における中国人との邂逅の意味を掘り下げる姿勢を貫こうとした。<sup>(注10)</sup>

一人目の中国人教師は、「僕」に在日中国人として生きる「誇り」を示した。二人目の女子大生は、「僕」の無意識の差別を指摘した。三人目の高校時代の知り合いは、忘却に浸る「僕」に、自己憐憫のうちに在日中国人として生きる姿を現した。当初は、彼らに他者の姿を見るのみであった「僕」は、「三十歳を超え」一人の「都市生活者」となったとき、十五年前女子大生を間違えて乗せた「山手線の車内」で、

不意に「ここは僕のための場所でもないんだ」という内心の声を聴く。都会の空虚に晒され疎外感に苛まれる「僕」は、「そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ。ここは私のための場所じゃないのよ」という女子大生の言葉が自分の身体の裡に響くのを聴き、そこに「もうひとつの中国」を見、「中国という言葉によって切り取られた僕自身」を見出したのである。「僕」は、現実喪失のただ中で「僕の中国」に埋没する自分を発見し、自分もあの女子大生と同じく「僕の中国」という自我の中に閉じこもる限り「何処にも行けない」し、誰とも出会うことはできないことを知ったのである。

東京——そしてある日、山手線の車輛の中でこの東京という街さえもが突然そのリアリティーを失いはじめる。その風景は窓の外で唐突に崩壊を始める。僕は切符を握りしめながらその光景をじっと見ている。東京の街に僕の中国が灰のように降りかかり、この街を決定的に侵食していく。それは次々に失われていく。そう、ここは僕の場所でもないのだ。

(中略)

誤謬……、誤謬というのはあの中国人の女子大生が言ったように（あるいは精神分析医の言うように）結局は逆説的な欲望であるのかもしれない。とすれば、誤謬こそが僕自身であり、あなた自身であるということになる。とすれば、どこにも出口などないのだ。

(『村上春樹全作品1979～1989③短篇集I』講談社一九九〇年九月三九頁)

「僕」は、三人の在日中国人が日本人社会から厳しく疎外されているたごとく、自身も都会の虚無と疎外に晒されていること、そのために自分が「どこにも出口などない」自我で鎧った存在と化していることを痛感し、初めて現実の中国へ向う希望を語り始める。そこには、「僕

らの言葉」や「僕らの抱いた夢」を無化する「東京という街」の「喪失と崩壊」のイメージがまとわり付いている。「僕」の抱く希望は、現実喪失と自我の崩壊という絶望を乗り越えずには踏み出しようのない「逆説的な欲望」である。

中国人教師との邂逅から二十年以上の歳月を経て、「僕」は彼の唱えた「誇り」を胸に、「友よ、中国はあまりにも遠い」と呼びかける。もしかしたら、それが「slow boat」の「slow」のもう一つの意味かもしれない。「僕」は、こうした迂遠な内的遍歴を経てはじめて、通じ合う距離の遠さを互いに知る中国人を「友」と呼び、彼らと遥かな希望を共にしようとするのである。

### おわりに

このような、自己を突き詰めたところに中国あるいは中国人との邂逅が不意に浮上するというプロットは、後年の『ねじまき鳥クロニクル』に引き継がれて、中国あるいは中国をめぐるテーマはさらなる深化を遂げた。ひたすら内界へ向う自己探求が、いかなる形で現実や歴史と結びつくか、『ねじまき鳥クロニクル』における中国というテーマについては、さらなる論考を重ねて行きたいと考えている。

## 注

- (注1) 『海』一九八〇年四月、『中国行きのスロウ・ボート』一九八五年五月中央公論社所収、『中国行きのスロウ・ボート』一九八六年一月中公文庫、『村上春樹全作品 1979～1989 ③』一九九〇年九月講談社、『象の消滅』新潮社二〇〇五年三月所収。『村上春樹全作品 1979～1989 ③』収録の際改稿が行われているが、本論は特に断った部分以外、『村上春樹全作品 1979～1989 ③』のテキストによって論じた。
- (注2) 川村湊は、「コトバをめぐる冒険」(『群像』一九八三年八月号、『村上春樹をどう読むか』作品社二〇〇六年十二月所収)で『中国行きのスロウ・ボート』は“中国人”というコトバに触発された〈僕〉のとりとめのない回想譚にしかすぎない、「村上春樹は言うだろう。『僕はただ中国人や羊のことを書きたかっただけだし、そこには意味もなきや形もない。あえて言うならそれは概念的な記号のようなものだ』と」と論じた。田中実は、「港のない貨物船」(『国文学解釈と鑑賞』一九九〇年十二月号)で、「『僕』にとっての中国は、基本的には『僕自身のニューヨーク』、『僕自身のペテルスブルグ』、『僕自身の地球』、『僕自身の宇宙』であると併置されているように、これは『僕』とある特定の歴史的空間との関係を述べたものでなく、『僕』と世界のあり方、『僕』の世界観を表したものであり、『僕』が中国に行き着けないという意味は、〈私〉から自分自身がいかに離れられないかということである」と論じている。ジェイ・ルービンは、『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』(新潮社二〇〇六年九月七七頁)で、「実際、この短篇は婉曲な書かれ方をしていたために、一九八三年に評論家青木保からこう論じられた。『ここまでくると、読む側にとっては、中国人のことはもうどうでもよくなってしまっていて、語られようとするのは六〇年代から八十年代にかけての『僕』の辿った道筋の里程碑であることがわかる……『スロウ・ボート・トゥ・チャイナ』の曲が鳴って、曲がおわってみると、そこに時代があって、しばし読者は己れの辿った道筋を考えさせられる』。たしかに初期の村上読者にとっては、こうした力が働いたかもしれない。だがいまでは、日本人にとってかなり厄介な記憶として、村上が中国と中国人を一貫して意識してきたと見ることができるだろう」と述べている。
- (注3) 山根由美恵「対社会意識の目覚め——『中国行きのスロウ・ボート』——」(『村上春樹〈物語〉の認識システム』若葉書房二〇〇七年六月五四頁)

- (注4) 中国・中国人に関する記述のある作品は、一九七九『風の歌を聴け』、一九八〇『1973年のピンボール』『中国行きのスロウ・ポート』、一九八二『羊をめぐる冒険』『シドニーのグリーン・ストリート』『駄目になった王国』、一九九〇・一九九一『トニー滝谷』、一九九二～一九九五『ねじまき鳥クロニクル』、二〇〇四『アフターダーク』、二〇〇九『1Q84』などである。
- (注5) 第1部『新潮』一九九二年十月号～一九九三年八月号、第1部・第2部一九九四年四月新潮社刊、第3部一九九五年八月新潮社刊、第1部～第3部一九九七年十月新潮文庫、第1部・第2部『村上春樹全作品1990～2000④』二〇〇三年五月講談社、第3部『村上春樹全作品1990～2000⑤』同年七月講談社
- (注6) 『群像』一九七九年六月号群像新人文学賞、一九七九年七月講談社刊、『村上春樹全作品1979～1989①』一九九〇年五月講談社
- (注7) 中央公論社版四〇頁。「プライドと自己憐憫の限りない振幅」という語句は、『村上春樹全作品1979～1989③』では削除されている。
- (注8) 鏑幹八郎は、『夢分析入門』でフロイトの「イルマの夢」分析における「語呂合わせ的な連想」に触れた後、次のように述べている。「語呂合わせの意義の重要性は、日本語の場合もっと大きいのではないかと思われる。言語を構成する音素としては、日本語は欧米語の六分の一ぐらいしかないということであり、それだけ多く、同音意義が多くなる可能性が高いという。また、日常生活の中でも、商店の電話番号を一一四七（いい品）、花屋さんが一一八七（いい花）と言い換えたり、タクシー会社の電話番号が一九五五（行く、ゴーゴー）と読みかえられたり、枚挙にいとまがない。また、同音意義として、セックスに関係した「性」が、驚いたことに、「聖」「制」「征」「姓」など、一三八通りもある（角川『漢和辞典』、索引、一九五九）。性交の「交」に至ってはものすごい数となる。例えば、「口」「公」「孔」「広」「坑」「高」など、三八〇通りのものがある。（右同、索引）。時にはこのような語呂合わせが、夢の分析の中で重要な意味を持っていることを、日本人であるわれわれは特に無視することができないであろう」（鏑幹八郎『夢分析入門』創元社一九七六年十二月二八七頁～二八八頁）
- (注9) 忘却／記憶という心理の対比は、支配／被支配、加害／被害という関係における心理関係を髣髴とさせる。
- (注10) 山根由美恵は、『中国行きのスロウ・ポート』は、内なる差別を行って

いた自分に気づいていく『僕』の姿が描かれていた。注目したいのは、内なる差別の問題を社会に即して描かなかった村上の問題意識である。(中略)つまり、アジアとの関係の解消の方法として、自身の内なる差別、自分自身の探求という方向へ向かったことである。」と述べている。(前掲書六七頁)

### 参考文献

- 藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社二〇〇七年七月  
川村湊『村上春樹をどう読むか』作品社二〇〇六年十二月  
風丸良彦『村上春樹短篇再読』みすず書房二〇〇七年三月  
黒古一夫『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版二〇〇七年十月  
ジェイ・ルービン 畔柳和代 訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社二〇〇六年九月  
山根由美恵『村上春樹〈物語〉の認識システム』若葉書房二〇〇七年六月  
河合隼雄『無意識の構造』中公新書一九七七年九月  
鏑幹一郎『夢分析入門』創元社一九七六年十二月  
岡真理『記憶／物語』岩波書店二〇〇〇年二月  
赤坂憲雄・玉野井麻利子・三砂ちづる『歴史と記憶』藤原書店二〇〇八年四月  
青山南「跳梁する〈影〉のバリエーション」『日本読書新聞』一九八三年七月十一日  
山川健一「海の手帳」『海』一九八三年八月号  
新井満「バック・グランド・ノベル環境小説の誕生」『週刊読書人』一九八三年十二月五日  
阿部好一「村上春樹論の試み—短編二、三の読解をめぐって—」『紀要』第22号 神戸学院女子短期大学一九八九年  
田中実「港のない貨物船——『中国行きのスロウ・ボート』——」『国文学解釈と鑑賞』一九九〇年十二月号  
青木保「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者に支持されるのだろう」『中央公論』一九八三年十二月号